

. 哺乳類（犬・猫を除く）、鳥類、爬虫類の調査のまとめ



## ・哺乳類（犬・猫を除く）、鳥類、爬虫類の調査のまとめ

ここでは、平成 14 年度に行った犬・猫を除く哺乳類、鳥類、爬虫類の調査結果をまとめた。

平成 13 年度の犬・猫調査では、ペットを飼育することに対する需要が拡大していることを指摘し、ペットに対する飼養者のニーズは、量的にも質的にも今後さらに高まると考えられるとした。一方、ペットの生産（繁殖）から最終飼育者への販売に至るまでの“流通構造”については以前から不明な点が多いと述べた（「 犬・猫調査のまとめ」参照）。

今回調査した犬・猫を除く哺乳類、鳥類、爬虫類についても、同様のことが言える。輸入統計でも、過去のいろいろな調査においても明確なペット流通の実態は明らかにされてこなかった。そうした中で、まず、流通実態の全体像を把握したいと取り組んだのがこの調査の目的でもあった。すべての業者に協力が得られたわけではなく、流通実態の一部を調べたに過ぎないものの、今回、犬・猫を除く哺乳類、鳥類、爬虫類の販売実態を調査した結果、以下にみられるような流通の特徴が分かった。

### 1. 犬・猫を除く哺乳類、鳥類、爬虫類の流通販売の実態について

#### 犬・猫を除く哺乳類、鳥類、爬虫類の輸入数について

『財務省貿易統計（平成 13 年）』によると、100 万頭のハムスター、7 万頭のリリス、5 万頭のその他のげっ歯類、3 万頭のカクレネコ、1 万頭のプレーリードッグのほか、7 億 8 千万頭もの鳥類・爬虫類・両生類が 1 年間に輸入されている。

#### 犬・猫を除く哺乳類、鳥類、爬虫類の取扱業者の形態について

犬・猫を除く哺乳類、鳥類、爬虫類の取扱業者の形態をみると、最も多いのは「小売」（業者数比率 76.6%）で 2 位以下を大きく引き離している。次いで、「卸売+小売」（業者数比率 9.9%）、「卸売」（業者数比率 4.3%の順となっている。

もっとも、取扱数は業者数に反比例し、業者数の少ない輸入業者が何十万頭という輸入動物の国内の入り口となっている。

#### 国内生産数について

犬・猫を除く哺乳類の年間生産数はアンケートの結果だけで 38,000 頭、鳥類の年間生産数は 84,500 羽、爬虫類の年間生産数は、4,400 頭である。

ヒアリング調査によると、アンケートに回答していない生産者のほかに、捕獲された動物や統計外の動物が流通している業態も見受けられるとのことであった。

#### 犬・猫を除く哺乳類の流通経路について

頭数ベースでみた流通量を多い順に5つまで整理すると以下の通りである。

- ・「海外」から「輸入、卸、小売」に向かう流れ（年間約 196,500 頭）
- ・「輸入、卸、小売」から「小売店」に向かう流れ（年間約 187,800 頭）
- ・「小売店」から「ペット飼育者」に向かう流れ（年間約 64,400 頭）
- ・「輸入、卸、小売」から「卸売業」に向かう流れ（年間約 63,700 頭）
- ・「卸売業」から「輸入、卸、小売」に向かう流れ（年間約 58,500 頭）

#### 鳥類の流通経路について

羽数ベースでみた流通量を多い順に4つまで整理すると以下の通りである。

- ・「輸入、卸、小売」から「小売店」に向かう流れ（年間約 149,200 羽）
- ・「海外」から「輸入、卸、小売」に向かう流れ（年間約 114,800 羽）
- ・「ブリーダー」から「輸入、卸、小売」に向かう流れ（年間約 66,500 羽）
- ・「小売店」から「ペット飼育者」に向かう流れ（年間約 34,400 羽）

#### 爬虫類の流通経路について

頭数ベースでみた流通量を多い順に5つまで整理すると以下の通りである。

- ・「海外」から「輸入、卸」に向かう流れ（年間約 332,300 頭）
- ・「輸入、卸、小売」から「小売店」に向かう流れ（年間約 293,000 頭）
- ・「輸入、卸、小売」から「卸売業」に向かう流れ（年間約 61,800 頭）
- ・「卸売業」から「輸入、卸、小売」に向かう流れ（年間約 30,700 頭）
- ・「小売店」から「ペット飼育者」に向かう流れ（年間約 28,200 頭）

#### インターネット取引について

犬・猫を除く哺乳類、鳥類、爬虫類の取扱業者でインターネット取引を行っている業者は15.2%となっており、具体的な取引内容は65%が「動物の販売」と「動物以外販売」と回答している。

インターネットでの動物販売は、取扱う対象が“生きもの”であるという性格上、実際の取引量は多くない。

もっとも、一部の爬虫類ではインターネットによる受注、宅配便による配送という商形態が定着しつつあるという。

宣伝や啓蒙活動にインターネットを利用することは有効とみられており、こうした利用は増加する見込みである。

#### 犬・猫を除く哺乳類の今後の飼養者と取扱の増減について

犬・猫を除く哺乳類については、今後の飼養者は「変わらない」が最も多く 38.6%。次いで「減ると思う」が 25.4%で「増えると思う」は 18.2%。

自社の犬・猫を除く哺乳類の取扱数は「今と変わらない」が半数の 51.8%を占めている。これ以外では「減らす」が 18.8%、「増やす」が 6.6%で「取扱をやめる」が 5.0%。取扱を減らすとやめるの合計が 24%ほどになることから、全体としては減少傾向となる。

#### 鳥類の今後の飼養者と取扱の増減について

鳥類の今後の飼養者の変化は「減ると思う」が最も多く半数以上の 52.1%。次いで「変わらない」が 29.7%で「増えると思う」は 7.6%しかない。鳥類の飼養者数ははっきりと減ると予想されているといえる。

自社の鳥類の取扱数は「今と変わらない」が半数近い 48.8%。「減らす」が 26.4%、「増やす」が 7.6%で「取扱をやめる」が 6.9%。取扱を減らすとやめるの合計が 33%ほどになることから、全体としては減少傾向となり、その割合は犬・猫を除く哺乳類を上回る。

#### 爬虫類の今後の飼養者と取扱の増減について

爬虫類の今後の飼養者の変化予想は、鳥類と全く同じである。「減ると思う」が最も多く半数以上の 52.1%。次いで「変わらない」が 29.7%で「増えると思う」は 7.6%しかない。爬虫類の飼養者数もはっきりと減ると予想されているといえる。

自社の爬虫類の取扱数は「今と変わらない」が 41.6%で「減らす」が 15.5%、「増やす」が 6.9%。「取扱をやめる」が 8.3%となっている。取扱を減らすとやめるの合計が 24%ほどになることから、全体としては減少傾向となる。

